

本日午後4時半からシンポジウム「アジアの新世代女性監督からの提言」を開催!!



ブ・ジョン監督 チャン・ルイ プロデューサー イ・ヘギョン ディレクター

アジアの新世代女性監督からの提言をテーマに、「今、このままがいい」(韓国)のブ・ジョン監督、「チベットの声

調」(中国)のチャン・ルイ プロデューサー、ソウル国際女性映画祭のイ・ヘギョン ディレクターの3名をパネラーに迎え、映画界の将来を展望します。

作品制作の背景にある韓国独特の家族観や中国のチベット民族問題など、各国特有の事情はどのように映し込まれているのか。さらに、映画の持つ社会的なメッセージに期

待するものは何か。皆さんにざっくばらんに語っていただきます。

コーディネーターは、当映画祭木全ディレクターが務めます。

入場無料

日時 9月3日(木)16:30~17:30
場所 ウィルあいち 3F 会議室 5
定員 40名

※定員になり次第締め切り

映画祭初日 ゲスト 9名を迎えて盛大にスタート

昨日、映画祭初日は、「今、このままがいい」始め 4 作品のゲストトーク、舞台あいさつがあり、各監督のほか出演俳優3名、原作者1名も迎え、大いに盛り上がりました。

▼「今、このままがいい」

ゲストトークには、ブ・ジョン監督とユ・スンヨンプロデューサーの二人が参加。



この映画を作ったきっかけについて、監督から「私自身2つ年上の姉がいて何年前かに姉妹旅行をし、その体験をきっかけに今回の映画の「姉妹の父親探しの旅」を思いつきました。

また、今回の映画のテーマは「家族」ですが韓国の伝統的な「家族」ではなくシングルマザーやシングルファザーなど現実に存在していても認められず、守られていない家族を表現したいと思いました。そのため、今回は性少数者の問題と結びつけて家族の多様性を描きました。」とのこと。

また、今後の映画制作について、「現在、映画会社と契約しシナリオを書き始めています。次の作品も今回と同様にテーマ「家族」についてです。次回作品は両親がいて子どもがいるという家族構成ですが、私自身一般的ではなく、認められていない家族に関心があるのでその観点から映画をつくっていきたい。」と抱負を語りました。

▼「星の国から孫ふたり〜「自閉症」児の贈りもの」

槇坪多津子監督にとって、あいち国際女性映画祭出品3作目となった本作品。上映前の舞台あいさつには上野楓恋さん(子役)、上映後のゲストトークには原作者の門野晴子さんも参加。



監督は『老親』の原作者、門野晴子さんから、2005年に「こんな本を書いたの!」という報告をいただきました。この本を読んでみて、びっくりしました。初めて、自閉症の大変さを知りました。自閉症児は24時間多動で、本当に目が離せないんです。それにもかかわらず、「コミュニケーションが大変なの!」と楽しそうに話す門野さんを見て、さらに、門野さんの「映像って、すごく伝える力を持っているんだよ」という言葉から、映画にしてみたらどうなるだろうと思ったのが、この映画のきっかけです。」と紹介。



門野晴子さんから、「日本には受け皿がないので、自閉症児を育てていくのが大変だということはいくぶん分かります。つらいのは分かるけれども、必ず子どもは恩返

しをしてくれ、生きがいとなってくれます。だから、とにかく笑って、見栄張って笑って生きていきましょう!」と力強いメッセージが寄せられました。

▼「女のみづうみ」

上映前の舞台あいさつに、吉田喜重監督と女優の岡田茉莉さんが登壇。



吉田監督は、「この作品は、私が松竹から独立して結婚と同時に初めて作った作品で、以前から興味があった川端康成の小説『みづうみ』で映画を作ることにしました。」と制作のきっかけを紹介し、「これは今風に言うと、見知らぬ男が女を付け回すストーリーの話です。岡田には主人と不倫相手の二人の男がいるのですが、金持ちの主人に買われた岡田は不満を抱き不倫をします。一人の女性が全く違う立場の男性と関係をもっていくところが見所です。」と語りました。

さらに、「映画を作ったのは私ですが、結論を出すのはこれから映画を見ていただく皆さんです。皆さんがこの映画を見て、何か不思議と訴えるものを感じるこそ本当の映画のコミュニケーションなのです。」とエールを送りました。

岡田さんは、「30年以上も前に今でこそ問題になっているストーリーを取り上げたことは、我が夫ながらビックリ!」と会場の笑

いを誘い、「この作品は、きっと今見てもとてもスリリングで、ラストも面白いと思いますので満足いただけるのでは。」と語りました。

▼「飛べ、ペンギン」

イム・スルレ監督と第4話主演のチョン・ヘソンさんを迎え、韓国の教育問題や熟年離婚などの社会問題について意見を交わした。



監督は、「今回の映画は商業用ではなく、韓国の人権委員会からの依頼を受けて制作したものです。人権をテーマにした映画という難しい印象を与えてしまうので、おもしろく、共感を持てるように作りました。」と作品制作の背景を紹介。

また、チョン・ヘソンさんをキャスティングした理由について、「この映画の第4話は一番長く、重要な役割を占め、熟年離婚をテーマに扱っていますが、老夫婦のケンカをかわいらしく撮りたいと思い、チョン・ヘソンさんはかわいらしく好感の持てる演技が出来る方だったので選ばせてもらいました。」と語りました。

チョン・ヘソンさんは、「2011年で女優活動が50年目になり、今まではドラマで活躍することが多かったのですが、今後は演劇にも挑戦していきたいと思っています。」と抱負を語りました。

本日の上映作品&来場ゲスト

※詳しくは映画祭オフィシャルカタログ(1部¥500)をご覧ください。

▼チベットの音調



単調に繰り返される独特な音調と腹の中から搾り出される低い歌声に乗って、この映画のキーワードとなる一人の女性が描かれていく。

そのシーンに続く導入の映像が見事である。切り立った黄土色の絶壁に濃く青い空、目に痛いくらい真っ白な雲、強い風にはためくロープにくくりつけられた五色のタルチョ(祈禱旗)、レンガ色の僧衣をまとった僧たちとマニ車を回す老婆、賑わいを見せるラサの町、山の斜面を引き上げられていく色鮮やかな曼荼羅、そして荘厳なボタラ宮。

観光客が思い描くとおりのチベットの姿がそこにあり、その中に場違いな感じがする集音マイクを手にした漢民族の美しい女性・安羽(アン・イー)がいる。彼女の姿に興味を持つ精悍なマスクのチベット人の若者アジャ、対照的な二人の間にある恋の予感が観客を映画の中に引き込んでゆく。

(鈴木 一 株式会社ワコー配給部)
チャン・ルイ プロデューサー チョ・ター・ジツ プロデューサー



▼エスケープ



7月になって、アフガニスタン反政府武装勢力カトリバンが、同国で6月末から行方不明になっている23歳の兵士を拘束していることをネット上で公開した。これ以前にも兵士や記者の拉致誘拐

があったが、インターネットに流れるこういった映像が、映画化のきっかけになったという。本作が実話を映画化したかのように、緊迫感にあふれた衝撃的作品であるのはそのせいだろう。

カトリーネ・ヴィンフェルド監督の、見事な長編デビュー作だ。デンマークは01年よりアメリカに同調し、アフガンとイラクに派兵をしている。自国のジャーナリストが戦地で拉致される、という設定こそ特異で政治的ではあるが、監督が描きたかったのは、人間としてどこまで自分を犠牲にして人助けができるかという、私たち誰の身にも起こりうることだ。

(渡辺芳子 ジャーナリスト)

カトリーネ・ヴィンフェルド監督

1966年生まれ。95年に国立ポーランド映画学校の監督コースを卒業。短編やドキュメントを手がけ、02年『Little Man』でシカゴ子供映画祭で入賞。DR(デンマーク国営テレビ)でエミー賞に輝いたドラマシリーズ『Unit 1』(03)のADを経て、スウェーデンのテレビシリーズ『The Crown Princess』(05)で注目される。本作が長編監督デビューとなる。



▼おくりびと



©2008 映画「おくりびと」製作委員会
所属楽団が解散し妻と共に郷里へ帰ってきた大悟。新たに見つけた仕事は、遺体を棺に納める仕事、納棺師だった。戸惑いながらも妻には冠婚葬祭関係の仕事と偽り、納棺師の見習いとして働き出す。そこには、さまざまな境遇のお別れが待っていた。国内外で各賞を受賞した感動作。

▼羅生門 デジタル完全版

平安時代、土砂降りの羅生門の下で、男が語りだす。「これほど不思議なことはない」と。盗賊の多襄丸が武士とその美しい妻を襲い、その後、武士は死んでしまうのだが、事件を語る3人の証言

はまったく異なっていた。「世界のクロサワ」を世に知らしめた記念碑的傑作。



© 角川映画

▼つぶより花舞台



万年不況の役者生活を送る(現在進行形)私は、8年前から夜勤で障害者の介助のアルバイトをしているのだが、成り行きで劇場のバリアフリー活動を始め、これから高齢者が演劇を楽しむにはどうしたらいいものか、と、たどり着いたところが、映画の題材になっている、60歳以上のアマチュア劇団「かんじゆく座」である。

はたして、新聞の募集記事を見て集まってきたのは、私の予想よりも心身ともに、はるかに若い、「高齢者」とは呼びにくい、60代14名だった。以前ドキュメンタリーを創った経験があったので、彼らの初舞台までの過程を映像におさめておきたいと思い、最初からカメラマンに稽古場にきてもらっていた。7ヵ月後の舞台初日まで、あらゆることがとんとん拍子に進んでいった。

(鯨エマ 監督)

鯨エマ監督

1973年生まれ。青年座を経て現在は劇団海千山千とシニアのアマチュア劇団かんじゆく座を主宰。劇場のバリアフリー活動にも携わる。主な出演作は『女将になります!』(NHK)、『富山が元氣、見たもん勝ち』(TUT)、映画『釣りバカ日誌イレブン』(99)など。2005年の「マンガと黒砂糖」に続いて本作が2本目のドキュメンタリー監督作となる。



▼今、このままだいい

ソウルでキャリアウーマンと

しての階段を昇りつつある妹ミョンウン。故郷の島で魚屋を営みながら一人で子どもを育てている姉のミョンジュ。父親のちがう姉妹は何年ぶりかで会った。母親が突然、亡くなったからだ。



ミョンウンは子どものころ父親に見捨てられたことに深く傷ついていた。「病院へ行く」と言い残して島を出た父は、それっきり帰らなかったのだ。ミョンウンはささやかな手がかりを頼りに、姉を誘って父親探しの旅に出る。

性格も暮らしぶりもまるでちがう姉妹の旅は、ギクシャクしている。けれども、ふたりの心は、やがて寄り添い重なりあっていく。姉はなぜ、便り一つ寄せなかった妹の誘いにのったのだろうか。妹は首尾よく父親に会うことができたのだろうか。

(川名紀美 ジャーナリスト、元朝日新聞論説委員)

フ・ジョン監督

1971年、韓国出身。27歳の時に初の短編映画『Spark』を制作。その後、韓国映画アカデミーに入学する。短編『His Humming』(00)が大邱インディペンデント・ショートフィルム・フェスティバルでエクセレント・フィルム・アワードを、『A Drop of Clear Salty Liquid』(02)で同映画祭特別賞を受賞し、本作で長編監督デビュー。



◆今日・明日のチケット情報/日にち、会場、売行き状況(○余裕有、△残少、×完売)、作品名(上映時間)

◎9月3日(木)

⇒ウィルホール

○「チベットの音調」(10:00)

○「エスケープ」(14:00)

△「おくりびと」(18:30)

⇒大会議室

○「羅生門」(10:00)

○「つぶより花舞台」(14:00)

○「今、このままだいい」(18:30)

◎9月4日(金)

⇒ウィルホール

○「生きていく日々」(10:00)

○「とらわれの水」(14:00)

○「私を撮って」(19:00)

⇒大会議室

○「あした天気になる?」(10:00)

○「空とコムロイ」(14:00)

○「プライアンと仲間たち」(18:30)